

61 2 3 4 5 6 7 8 9 10 1 2 3 4 5

特260

4

488

小原清幸

昭和改訂版
内六

始



小原御幸

(梗概) 平家の一門、長門の國早鞆の沖にて没落せし時、安徳天皇の御母建禮門院も御入水遊はされしが、源氏の兵に救はれ給ひ、京都に送られ、秋の頃大原寂光院に移らせ給ひて、ひたすら安徳天皇竝に二位殿の御跡を弔ひておはしけり。後白河法皇は建禮門院を御子として御養ひありたる程なれば、女院の無事に御歸洛を喜び給ひ、偶々補陀落寺御幸に託し、御忍びにて寂光院へ入御あらせられたり。法皇は周圍の景色を眺め給ひて阿波内侍と御物語あるうち、女院は大納言の局を伴ひ上の山より花を摘みて御歸りあり、法皇と御對面の御心のうちいかになりけん、やがて安徳天皇御最期の想ひ出を事細かき御物語りあり共に御涙にくれさせ給ひしが、時移りて御還幸仰せ出されしに女院は盡きぬ名残を惜ませつといつ迄も柴の戸に倚りて御輿を見送らせ給ひぬ。



シテ	建禮門院
後シテ	前同
ツレ	後白河法皇
ツレ	大納言の局
ツレ	阿波の内侍
ワキ	萬里小路中納言
ワキツレ	大臣
ワキツレ	輿丁二人
所	山城國大原
季	春

小原清幸

わき連
大臣
相 是は後白川の院に仕へ奉る臣下なり。
 勅もは度光帝二位殿を始奉り平
 家此門九州長門國早友の沖ふ
 て悉果給ひくは女院もは身を投さ
 せ給ひゆを取あぢ事なまに甲斐又る記は

命助りまれば、まゝに三河守範頼、
九郎大夫の判官義経、兄弟を、
中、三種の神寶とゆへなく、都子納
まゝに、ひひ、去程、小女院の都子、うつら
せ給ふべし、まゝに、先帝、安徳天皇の
清き菩提、并よ二位、及乃、以、初、出、席、ひの

為、小原の寂光院、まゝに、世を、いと、ひ、成
座を、まゝに、まゝに、成、法、皇、清、き、まゝに、まゝに、
れ、清、と、まゝに、ひ、有、まゝに、まゝに、まゝに、まゝに、
清、幸、の、山、路、を、も、中、付、た、まゝに、まゝに、まゝに、
永、上、山、里、の、拍、乃、淋、た、事、し、持、まゝに、まゝに、まゝに、
まゝに、まゝに、まゝに、まゝに、まゝに、まゝに、まゝに、まゝに、

乃と不そ^レ却^レの方^ニ此^ノ音^ハ位^ハ聞^クとほ^シ
申^スへ^テ不^レませ^ニ垣^ヲやう^キぬ^レ志^ヲげ^テた^リ
柱^ヲ立^テ居^ルは^シ事^ヲて^モ物^ヲ思^フへ^ト人^ノ目^ヲた^シき^ニ
丁^ノろ^ウ安^クの^リ里^ヲけ^キ折^ルこ^ノに^ハ心^ヲあ^ラれ^ル
ど^モふ^ノもの^ハ歩^ク残^リぐ^ハ爪^ヲ末^ニ此^ノ芥^ノ此^ノ音^ハ
お^シく^レ梢^ニ此^ノ鼠^ノ猿^ノの^ハお^シう^ラ是^レら^ノ乃^ハ音^ハお^シ

ら^ニて^モ正^シま^レ此^ノは^シら^ニま^シ音^ハ濁^ク侍^人ま^シ
れ^ニ又^ニ成^ノ果^ヲ言^フ草^ノ歌^ノ淵^ヲが^ハ街^ニに^ハ志^ヲげ^ル
ま^シと^モひ^ノ乃^ハ好^ク侍^トて^モ一^ニ回^ニ原^ノ意^ヲが^ハと^シ不^レ
世^トも^ウる^ハふ^ハ神^ノ者^ノ波^ノ部^ノく^レ
い^ウふ^ハ大^ノ納^ノ言^ノの^ハ局^ノう^ラろ^ノの^ハ山^ノよ^ハ上^ガり^シ
櫻^ヲを^ハ摘^ルべ^シ局^ノわ^ラら^ハも^ハ出^テ仕^テ申^スハ^ハ爪^ヲ末^ニ

巖を折り供清に備へ申はる

上サシ多サシもへ便サシおた車サシたふれをサシ懸サシ達サシ太子サシ

を浄飯王の都をお檀特山此さぐり

き乃を凌ぎ葉摘水汲新同上魚と

振とに難行し仙人小供へさせ給ひて

終も成乃なるともや我も佛の爲な

まば清花道とるまぐり山涼く入た

まふく中入九重乃花の名跡を

るそやま葉をそふふ山跡次上歩

ゆくそ跡もふりみ草く小原乃清

幸あきと急ぐんあき詞乃幸をる子め申はる間

小原に入清いサシ引サシ新て大原よみ幸なる

て寂光院のまほげんは渡せをさむむ
まふ庭はなすも茂里あひてまろ柳
糸を札しは池の萍波よゆれて
錦をけしきりとうらゝ家屋乃山吹
咲乱き八重立雲の錦間より山時鳥
此一ちうも君は清幸を侍り不あり

法皇^中の法皇池の汀をよ敷見あつて池水に
汀乃桜花あて浪は花こそ巻成をれ
回上^{あり}にちる心名の障よまはるく
水乃きさくよあて深^{ヤラ}乃垣翠
苔北山^{ヤラ}あふりく花^{ヤラ}もよも及び難
一^{ヤラ}字の清^{ヤラ}堂^{ヤラ}はる^{ヤラ}巻^{ヤラ}破^{ヤラ}幸^{ヤラ}て^{ヤラ}わ

霧ふぶごんの香をよたたと布そあて
月も又常任乃灯をかぐといのほ
取ら拍すごや
是成社女院
の中
の古庵室少てあげよ
朝もあき
朝顔をひりり里
霧を深く鎖せり
阿く拍まごのとりきあを
しりよは庵

室の内へ案内申す
誰よて波里
ゆぞ ^{あき} 是ハ万里北小治の申納云よて
ゆ ^{由緒} それを叔人目稀なる山申へ
何連、出渡りゆぞ ^{あき} さんゆ女院の法
住居、出訪ひの為、法皇是と浄事
はすゆ ^{由緒} 女院ハ上の山へ花つとに法

およそ今^ナ法^フ留^リの^ナよ^クて^ハ 女^メ院^ノに^シて^ハ 由^リ中^ノに^シて^ハ 女^メ院^ノ
中^ノに^シて^ハ 清^ク幸^ニ此^ノ由^リ中^ノに^シて^ハ 女^メ院^ノ
ハ上^ニ此^ノ山^ノへ^テ花^ヲ摘^ミふ^ル由^リ出^スよ^クて^ハ 今^ナ法^フ留^リの^ナ
由^リに^シて^ハ 暫^ク此^ノ取^リの^ナ由^リを^シる^ル事^ハ 由^リ留^リ
を^シる^ル事^ハ あり^しよ^クて^ハ 女^メ院^ノに^シて^ハ 女^メ院^ノ
此^ノ阿^ノま^ノせ^ノ油^ノに^シて^ハ 成^ル者^ナぞ^シ 女^メ院^ノに^シて^ハ 女^メ院^ノ

高^クれ^ハ法^フ留^リの^ナ 是^ノに^シて^ハ 女^メ院^ノに^シて^ハ 女^メ院^ノ
肉^ノ付^クた^ル果^ノに^シて^ハ 女^メ院^ノに^シて^ハ 女^メ院^ノ
海^ノに^シて^ハ 女^メ院^ノに^シて^ハ 女^メ院^ノに^シて^ハ 女^メ院^ノ
身^ノに^シて^ハ 女^メ院^ノに^シて^ハ 女^メ院^ノに^シて^ハ 女^メ院^ノ
女^メ院^ノに^シて^ハ 女^メ院^ノに^シて^ハ 女^メ院^ノに^シて^ハ 女^メ院^ノ
上^ノの^ナ山^ノへ^テ花^ヲ摘^ミふ^ル由^リ出^スよ^クて^ハ 女^メ院^ノに^シて^ハ 女^メ院^ノ

みま 由緒 大納言の局、今か〜またせ
お〜は〜さ〜入〜お〜は〜は〜は〜
上サシ昨日も今日も〜
あま 二人あまもあまぬけ身あがり、唯先帝
の由緒、は〜は〜は〜は〜は〜は〜は〜
極重悪人、他方便、唯祇陀佛、得生

極樂、まよを初め、まり二位殿、一門の
人ご成等、正覚、南無阿弥陀佛、
庵堂の、名に人者の、中へ 有 暫く
是よ、由緒 由緒 只今、一我、あのそふ
は〜は〜を女院の、は〜り、あ〜さ〜ふ〜ぬ
扱 法 扱、きり女院、大納言の局、は〜は〜きぞ

内侍上
花筵ひちりにけさせ給ふ女院よて
わさうせ給ふ凡そ殿折替へするは
大袖を此局なりし中に法皇の
清幸よてはあしぬ申す小松殿
執の富深れ世茂もなきもなして世
名を又もせ給ふる波のあ神楽

幸一たもはいまや 同下
法の人因り及よと軽むなり 上
此窓の影く 小接取の光めを初
一法に十念乃葉の庭よハ聖堂の
本蓮を待つはよ思ひきりまきるんふ
此書古よ改るりと程をひおの潤部

歩フ穿トや君ハ心ハ憂ハふ最トの憂ハを来リきて
衣ハもさそふ大ト東ハや芹ハ生レ乃ト里ハ心
ぬ道ハ織ハの清ハ水ハ月ハ如クで衣ハ彩ハや今
も跡ハる鏡ハ上トギハぬや清ハ幸ハ此ハ折ハもハ
いりなる時ハ心ハあるんト上ト春ハ春ハ過レるも
早ト北ハ祭ハりの折ハたれをト草ハ葉ハよは

るる来レ立レ去レの名ハ残ハぞ折ハまる
目ト上ト山ハにハくは白ハ雲ハもト花ハ
乃ト筵ハりやト夏ハ草ハの志ハげト東ハ乃
そことなく分ハ入ハ強ハふ乃ハの末ハ愛ハと
てなトくト實ハ寐ハ光ハの志ハづトりなトは
光ハの彩ハをおハめト光ハ乃ハ彩ハも

ゆききたる玉ねが枝よ咲替ふを

して池の波浪夏よりきて 是もは幸を

して待顔子 月 暮る葉隠きの逢梅初

花よりも珍しくに 中とやうらる

を振茂と衣と 衣より幸はくも

糸一やげ清幸葉の飛乃志を

が程も有べき住居成べやあるべた

住為なる處 思ひきも深山の奥

中住居して雲井の月をよそに見

んとわく振にむひ出し 山を乃清

幸 忍ましくも有難ふ丁替り

法皇 迎曾ある人の中ける女院は六乃此

サイツコロ

振海子不^レ以^レ鏡^一けりともや^ハ仏^ハ善^ハ薩^ハの
く^レ為^レたりて^ハい^レ給^フ事^ハを^レた^レよ^ハ不^レ當
に^レ持^シく^レ勅^レ定^ハ去^レ出^レ事^ハた^レれ^レとも
傳^レ家^ハ身^ハを^レ案^シて^ハ見^ルふ^ハ夫^ハ身^ハを^レ親
を^レれ^レを^レ存^シた^レお^レろ^ハ根^ハを^レ離^レきた^レる^ハ草
命^ハ我^ハに^レ誦^シま^シき^レバ^ハ江^ハの^レ不^レとり^ハよ^ハお^レふ^レら^レざ

子^ハ舟^ハ上^レは^レま^シば^ハ天^ハ上^ハの^レ樂^ハも^ハ身^ハに
白^ハ雲^ハの^レ玉^ハ首^ハを^レぐ^レ果^ハぬ^ハ年^ハ月^ハも
終^ルよ^ハみ^レ衰^レた^レれ^レと^レり^ハへ^ハの^レ消^ハも^ハな
ら^レま^シぬ^ハ命^ハの^レう^レち^ハよ^ハ六^ハ乃^ハの^レ蒼^ハも^ハ迷
ひ^ハし^ハた^レり^ハ先^ハ一^ハ門^ハ海^ハ乃^ハ波^ハも^ハ浮
沉^ハも^ハる^レべ^ハも^ハま^シき^レぬ^ハ舟^ハの^レ内^ハ海^ハに

暇めども^ヤ 漱をれば^ハ 飲水せんに^ハ 餓忍^ヤ 是
此^ハ ともあり^ハ 又^ハ 亦^ハ 時^ハ 汀の波^ハ 是^ハ 露
に^ハ うち^ハ 久^ハ 走^ハ ろ^ハ 乃^ハ ん^ハ 地^ハ して^ハ 舟^ハ 舟^ハ 我^ハ
里^ハ 法^ハ 泣^ハ 叫^ハ 喚^ハ 乃^ハ 飛^ハ 人^ハ
を^ハ 新^ハ や^ハ 浅^ハ ま^ハ ー^ハ や^ハ ^上 陸^ハ の^ハ 争^ハ ひ^ハ 阿^ハ 有^ハ
時^ハ 是^ハ ぞ^ハ 謀^ハ む^ハ 目^ハ 此^ハ 前^ハ の^ハ 修^ハ 羅^ハ 乃^ハ の^ハ

戦^ハ ひ^ハ あ^ハ 怖^ハ ー^ハ や^ハ 救^ハ こ^ハ の^ハ 初^ハ 此^ハ 諦^ハ の^ハ
者^ハ き^ハ け^ハ バ^ハ 言^ハ 生^ハ 乃^ハ の^ハ 乃^ハ 振^ハ を^ハ 見^ハ 守^ハ も^ハ
目^ハ 一^ハ 人^ハ 乃^ハ 此^ハ 苦^ハ ー^ハ み^ハ と^ハ 成^ハ 果^ハ る^ハ 浮^ハ 身^ハ 此^ハ
を^ハ て^ハ ぞ^ハ 能^ハ ー^ハ き^ハ ^法 謀^ハ む^ハ 乃^ハ ろ^ハ う^ハ こ^ハ 事^ハ 有^ハ
哉^ハ 叔^ハ 先^ハ 幸^ハ 此^ハ 法^ハ 之^ハ 初^ハ 乃^ハ 有^ハ 振^ハ 何^ハ と^ハ の^ハ
波^ハ 里^ハ 山^ハ ひ^ハ つ^ハ る^ハ 法^ハ 拘^ハ 語^ハ 少^ハ 一^ハ 時^ハ 此^ハ 乃^ハ

振申ふはきて恨めしや長門國早
友とあしんよて筑紫へ先首あらべき
と申中あひしは殊なれは帝の
心せし程よ薩平くもやあきんと
申せし折る上里汝ははらま今
あかうよと見へしに結さおのり

安^上最^上此^上を^上身^上に^上帝^上に^上名^上を^上を^上左^上右^上に^上胎^上
に^上持^上て^上宮^上船^上の^上供^上せ^上よ^上と^上て^上海^上中^上に^上
か^上ん^上て^上入^上新^上申^上納^上云^上知^上成^上四^上六^上沖^上な^上は^上
船^上の^上礎^上を^上引^上あ^上げ^上増^上と^上あ^上し^上ん^上よ^上い^上と^上た^上
乳^上人^上子^上乃^上家^上長^上が^上弓^上と^上し^上を^上取^上る^上
し^上其^上時^上二^上位^上及^上

神文の二つ交に、殊袴乃そを言く
をきんで、家身ハ女人ありとて、も教の
手ハ、はる海、まよ上の、清鏡中、法
んと、安海、天皇、此、清手、を、ま、姫、み、陰、む
何、必、ハ、由、く、そ、と、勅、旨、あり、小、世、國、と
中、ハ、ま、道、出、多、く、か、く、淺、浦、ハ、た、下、あり、

傳
極、衆、世、界、と、中、て、目、お、し、新、乃、波
此、中、に、ま、さ、か、く、姫、な、れ、ハ、清、幸、手、ま、り、中、
法、ん、と、な、く、く、卷、ハ、姫、ハ、お、ハ、心、均
たり、申、上、東、に、向、ま、姫、ひ、天、照、太、神
ま、清、鏡、中、ま、ま、姫、ひ、く、又、十、念、乃
清、乃、小、病、ま、む、り、ま、ま、せ、ね、ハ、ハ、海、ハ、
ヤ、ヲ、ハ

上^レ今^レそ^レ志^ルる^ル 法^レ衣^レ澤^レ川^ノの^レ流^ルも^レあ^レ波^レ乃^レ
唐^レも^レ都^レあ^レ里^レと^レは^レ是^レ我^レの^レ劫^レ此^レ唐^レ
兼^レも^レて^レ子^レ孫^ノの^レ唐^レも^レ入^レ給^ルふ^レと^レつ^レら^レ
も^レ法^レの^レ沈^レを^レ源^レ氏^乃武^レ士^とま^レ
あ^レま^レく^レ甲^レ斐^レた^レの^レま^レ今^レあ^レぐ^レこ^レま^レ
龍^レ顔^レよ^レあ^レひ^レま^レり^レ不^レ覚^レの^レ洞^レの^レ神^レを^レ

志^レ不^レる^レぞ^レを^レの^レり^レき^レつ^レま^レで^レい^レも^レ清^レ
名^レ残^レい^レり^レで^レ法^レき^レぬ^レき^レや^レな^レあ^レお^レと^レ
ま^レむ^レま^レき^レは^レ清^レ樂^レを^レや^レめ^レは^レる^レ
ぐ^レと^レ寂^レ光^レ院^を出^レ給^ルへ^レバ^レ女^レ院^に
あ^レ楽^レ此^レ戸^ノよ^レ志^レは^レ一^レが^レ程^を見^レ送^レら^レせ^レ
給^レひ^レて^レ法^レ華^レの^レ家^ノよ^レ入^レ給^ルふ^レ

374

54

著作權所有

昭和十二年六月廿五日印刷
昭和十二年六月三十日發行

定價金五拾錢

東京市下谷區上野櫻木町四十八番地

著者 寶生新

東京市京橋區銀座西六丁目三番地

發行兼印刷者 江島伊兵衛

發行所 下掛寶生流謄本刊行會

374

374

終

